絵画印象を評定する形容詞対尺度構成

○長 潔容江¹・原口雅浩²

(¹久留米大学心理学研究科・²久留米大学文学部心理学科)

キーワード：絵画印象，SD 法，形容詞対

Scale construction of adjective pairs for evaluating the impression of paintings.

Kiyoe CHO¹, Masahiro HARAGUCHI²

(¹Graduate School of Psychology, Kurume Univ., ²Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume Univ.)

Key Words: the impression of paintings, Semantic Differential Technique, adjective pair

これまで，絵画のタイトル (Franklin, Becklen, and Doyle, 1993) や表現技法の教示 (石坂・高橋, 2006) など，さまざまなテーマで絵画に関する心理学的研究が数多くなされている。その際，絵画印象を測定する方法として Semantic Differential Technique (以下，SD 法) がよく用いられている。

しかし，絵画印象の研究で使用された尺度は，それを構成する因子および形容詞対の内容が研究によって異なることが多い。そのため，絵画印象の研究を行う際に，どの因子および形容詞対から構成される尺度を使用するのが適しているかを判断するのは難しい。

そこで，本研究では，これまでの絵画印象の研究で使用された SD 法による形容詞対尺度構成を検討し，絵画印象を評定する形容詞対尺度を作成した (研究 1)。さらに，この形容詞対尺度を用いて絵画印象を評定させ，因子分析を行って研究 1 の結果を確認した (研究 2)。

研究 1：絵画印象の研究における形容詞対尺度構成の検討 方 法

形容詞対の収集：絵画に関して研究された論文の中から，既存の西洋画および日本画を刺激として使用している 14 本の論文を採択し形容詞対を収集した。

尺度作成の手続き：Microsoft Excel 2010 に，論文に記載された因子やそれに属する形容詞対などを入力した。その後，同じ意味をもつ形容詞は表現を統一し，Excel のピボットテーブル機能を用いて，収集した形容詞対と属する因子をまとめた。

結 果

収集した形容詞対と属する因子を調べた結果，99 種類の形容詞対と 29 種類の因子があった。1 つの因子で算出された合計が 4 個以上ある形容詞対を，尺度に用いる形容詞対として選択した。その結果，活動性 (12 項目：安定したー不安定な，興奮的ー沈静的，動的ー静的など)，明るさ (8 項目：明るいー暗い，楽しいー寂しい，陽気なー陰気など)，評価性 (4 項目：美しいー醜い，好きー嫌い，良いー悪いなど)，やわらかさ (3 項目：柔らかなー固い，ゆるんだー緊張した，鋭いー鈍い) の 4 因子，形容詞対 27 項目が得られた。

研究 2：絵画印象を評定する形容詞対尺度の作成 方 法

調査協力者：大学生 116 名 (男性 32 名，女性 84 名)。

評定尺度：絵画印象は，研究 1 で得られた活動性，明るさ，評価性，やわらかさの 4 因子，27 項目の形容詞対について，SD 法 (7 段階) を用いて評定した。

絵画刺激：Marković & Radonjić (2008) の研究で使用された，Figural Realism および Abstract art の絵画の中から，長・原口 (2012) より得られた規則性と単純性因子得点の両極に位置した絵画を各 2 枚，計 4 枚を選択し使用した。

手続き：調査用紙と A4 の用紙にカラー印刷した絵画を配布し，評定してもらった。

結果と考察

表 1 は，形容詞対 27 項目について，4 枚の絵画ごとおよび 4 枚の絵画全体で最小二乗法，プロマックス回転による因子分析を行った結果をまとめたものである。表の値は，因子負荷量が高かった形容詞対を絵画ごと，さらに絵画全体でまとめ，1 つの因子にのみ負荷量が高い形容詞対は 1 点，2 つの因子にまたがって負荷量が高い形容詞対は 0.5 点で得点化したものである。なお，得点が高いものには網掛けした。

表 1 より，活動性因子は 12 項目中 7 項目，明るさ因子は 8 項目中 5 項目，評価性因子は 4 項目中 3 項目 (他の因子と重複したものを除く)，やわらかさ因子は 3 項目中 2 項目が，研究 1 と同じ結果となった。

しかし，それ以外は他の因子に属している，あるいはどの因子にも含まれていないことから，評定する絵画によって，どの因子に含まれるかが変わる形容詞対であると考えられる。

表 1 因子分析の結果のまとめ

因子	形容詞対	活動性	明るさ	評価性	柔らかさ
活動性	不安定な — 安定した	4	0	1	0
	興奮的 — 沈静的	5	0	0	0
	動的 — 静的	5	0	0	0
	平凡な — 個性的な	3	0	1	1
	まとまった — ばらばらな	1	0	3	0
	男性的 — 女性的	1	0	1	1
	感情的 — 理知的	4	0	0	0
	強い — 強い	1	0	1	2
	健康な — 不健康な	0	3	2	0
	新しい — 古い	0	0	0	1
	子供っぽい — 大人っぽい	2	1.5	1.5	1
	派手な — 地味な	3.5	1.5	0	0
明るさ	暗い — 明るい	1	4	0	0
	楽しい — 寂しい	0	5	0	0
	深みのある — 表面的	0	1	1	1
	暖かい — 冷たい	0	5	0	0
	軽い — 重い	0	1	0	1
	単純な — 複雑な	2	0	1	0
	神経質でない — 神経質な	0	3	0	1
	陽気な — 陰気な	0	5	0	0
評価性	美しい — 醜い	1	0	5	0
	つまらない — 面白い	2.5	0	2.5	0
	好き — 嫌い	0	0	4	0
	良い — 悪い	0	0	4	1
柔らかさ	柔らかな — 固い	0	0	0	3
	緊張した — ゆるんだ	0	1	0	2
	鋭い — 鈍い	1	0.5	0	0.5

以上の結果から，絵画印象は活動性 (7 項目：不安定な，興奮的，動的，平凡な，感情的，子供っぽい，派手な)，明るさ (5 項目：暗い，楽しい，暖かい，軽い，神経質でない，陽気な)，評価性 (3 項目：美しい，好き，良い)，やわらかさ (2 項目：やわらかな，緊張した) の 4 因子，形容詞対 17 項目で評定できると考えられる。

今後の研究課題としては，評価性因子およびやわらかさ因子の形容詞対の項目数を増やすことがあげられる。

引用文献

長潔容江・原口雅浩 (2012). 絵画の秩序と評価に関する感性心理学的研究 九州心理学会第 73 回大会発表論文集, 19.
Marković, S. & Radonjić, A. (2008). Implicit and explicit Features of paintings. *Spatial Vision*, 21, 229-259.